来年度行事のお知らせ

テーマ展示

■ ①「南蛮文化とキリシタン」
②「古地図にみる日本」
③「源氏物語絵　その１」
期間　1992年７月28日(火)～８月30日(日)

■ ①「府内の城と寺社」
②「源氏物語絵　その２」
期間　1992年９月５日(土)～10月18日(日)

■ ①「松平忠直と滝廉太郎」
②「源氏物語絵　その３」
期間　1992年12月8日(火)~1993年1月31日(日)

■ ①「江戸時代の古絵図」
②「御城下絵図」
③「源氏物語絵　その４」
期間　1993年２月６日(土)～３月28日(日)

開館５周年記念特別展

■「覇権をめざした英雄たち－大友宗麟とその時代」期間1992年10月24日(土)～11月29日(日)
（＊なお、期間中は特別料金となります。）

各種講座

■ ふるさとの歴史講座
①考古のコース　期間1992年４月～６月
②歴史のコース　期間1992年７月～９月
③古文書のコース　期間1992年11月～１月
（＊日時　毎月第２土曜日　14時～15時30分）

■ 史跡見学会　日程　５月下旬

■ 夏休みジュニア講座　竪穴住居模型づくり
日程　Aコース(8月上旬)Bコース(8月下旬)
（A・Bコースともに５日間）

■ 陶芸講座　日程　１月下旬（５日間）

■ はた織り講座　日程　２月中旬（５日間）

■ 拓本講座　日程　３月上旬（５日間）

歴史を映画でみる会

■ 実施日と上映フィルム（予定）
４月26日「縄文時代」・「能」
５月24日「発掘吉野ケ里遺跡」・「京都洛中洛外」
６月28日「飛鳥と奈良の都」
「日本の稲作－その心と伝統」
７月19日　国宝「源氏物語絵巻」
８月23日「桂離宮」・「鉄砲の伝来－キリスト教と西洋技術（アニメ）」
９月27日　国宝「信貴山縁起絵巻」
10月25日「信長・秀吉・家康」・「利休の茶」
11月22日「よみがえる光琳屋敷」
「東京－大江戸の春」
12月20日「松尾芭蕉」
「絵図に偲ぶ江戸のくらし」
１月24日「にっぽん洋食物語」・「大仏開眼－仏教文化と奈良時代（アニメ）」
２月28日「和鋼風土記」・「花ひらく王朝文化－清少納言と紫式部（アニメ）」
３月28日「壁画よみがえる」
「日本列島と朝鮮文化」
（＊11時・13時・15時の３回上映）

編集後記

早いもので資料館がオープンして５年目が経過しました。これを記念して新年度では記念特別展を開催する予定です。また今まで資料館で購入してきた資料を一般公開する機会として、新たにテーマ展示も行います。今後とも一層充実した資料館づくりに努力していきたいと思います。　（M. T）

▲豊後国分寺史跡公園案内図

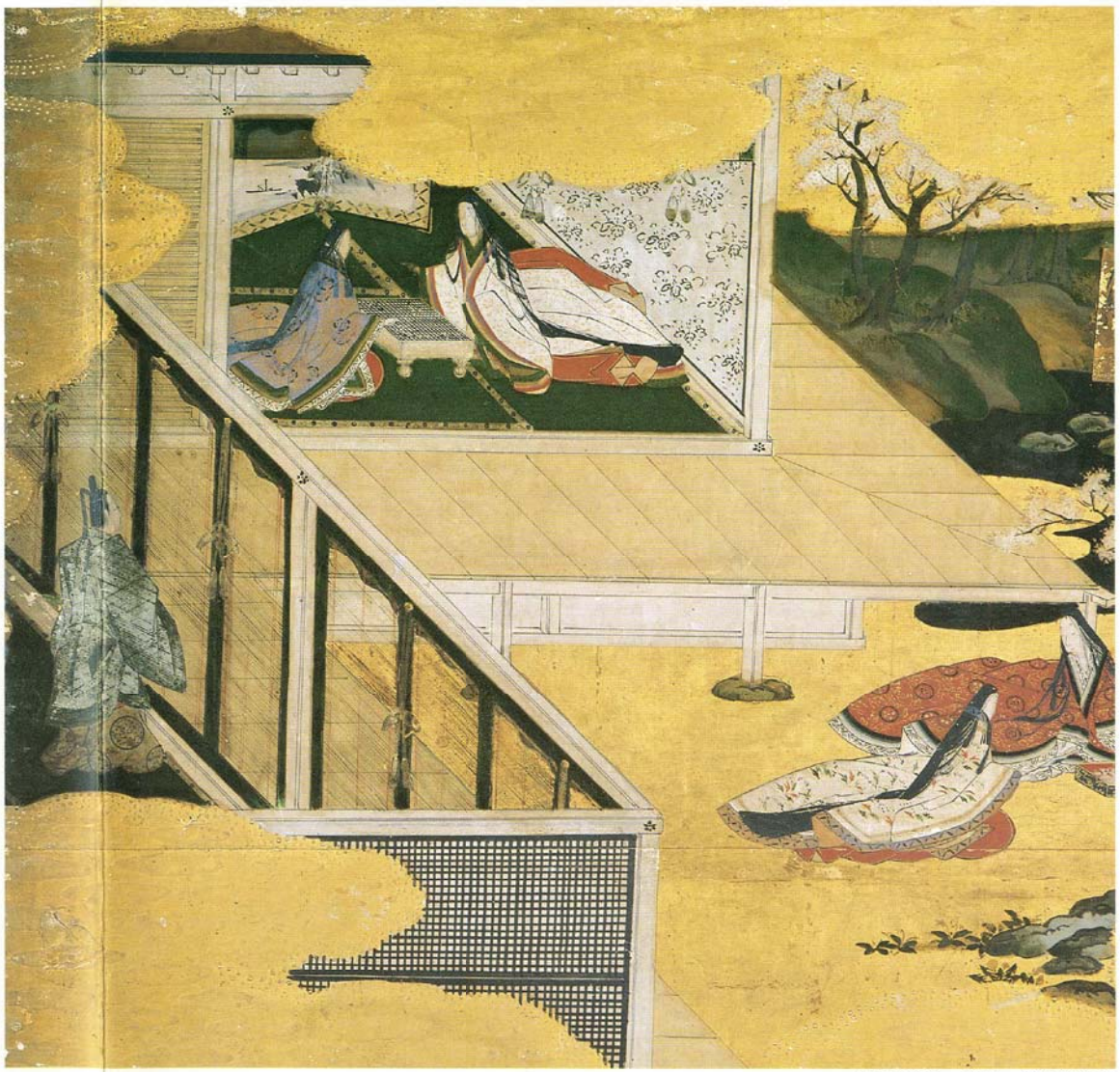
利用案内

■開館時間　午前9:00～午後5:00（入館は4:30まで）
■休館日　月曜日（祝日にあたるときは翌日）
祝日の翌日
年末年始（12月28日～1月4日まで）
■観覧料　大　人　200円（団体150円）
小・中・高生　100円（団体 50円）
（市内の小学校生は無料です）
＊団体は30名以上
＊特別展の開催中は別料金となる場合があります。

資料館ニュース　No.18
発行　1992.3.31

大分市歴史資料館
大分市大字国分960番地の1
〒870 ☎（0975）49－0880

大分市
歴史資料館ニュース
1992 3.31 18
Oita City Museum



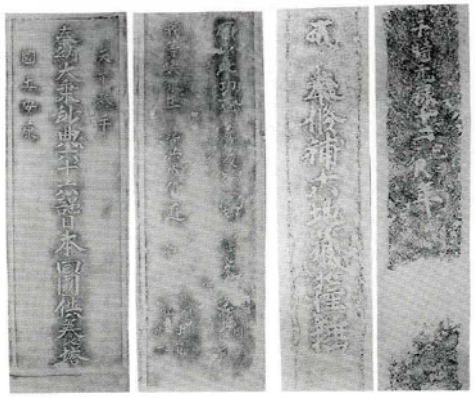
源氏物語絵　巻44　竹河（館蔵）

新講座「拓本講座」開講

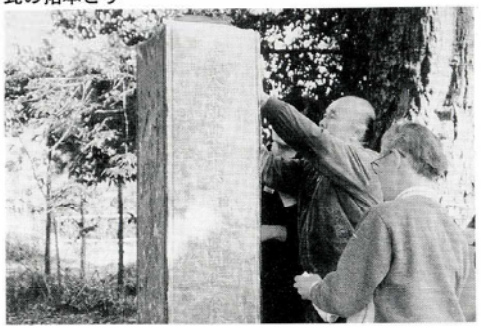
日程　1月21日～1月25日

今年度新たに実技講座として拓本講座を開講しました。ここでは、5日間という短期間の日程のなか、拓墨づくり、タンポづくり、瓦の拓本どり、表装の仕方、野外での拓本どりといった、拓本製作に必要な最低限度の内容を学んでいただきました。参加された20名の受講生の皆さんは、紙の貼り方や拓墨の打ち具合などで苦労されながらも、最終日には時間も忘れていろいろな石造物の拓本どりを楽しまれていました。

瓦の拓本どり



生徒さんたちの作品



野外での拓本どり

表紙紹介

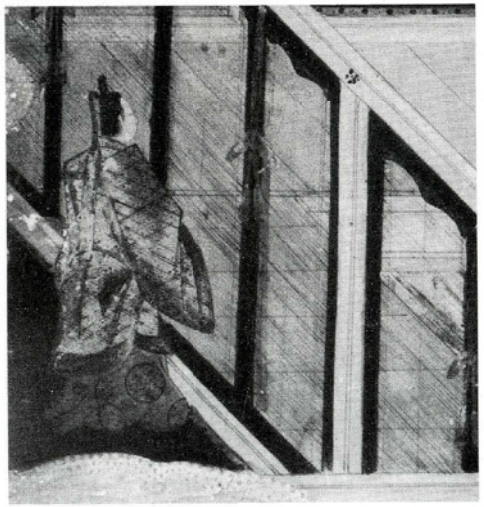
源氏物語　巻44　竹河

これまで継続して収集している源氏物語絵と一連の資料で、今年新たに購入したものです。全54面のうち23面が揃いました。

巻44「竹河」は源氏が若い頃恋をした夕顔の遺児で成長後自邸に引き取り養育した玉蔓の二人の姫君をめぐる物語です。彼女は夫髭黒の大将の死後ひっそりと暮していましたが姫君の美しさを聞きつけた男性が次々に求婚に現れ、悩んでいました。源氏の孫蔵人少将もそのうちの一人でした。

本絵は春三月、蔵人少将が玉蔓邸を訪れ、二人の姫君が桜の花を賭けて碁に興じている姿を垣間見ている場面です。池のほとりには桜が今をさかりと咲き誇り、女房がそれを集めています。画面左に立って入るのが蔵人少将で、彼は一層恋心を募らせるのでした。桜と色とりどりの十二単衣が金地に映え、画面に華やかさを添えています。

金地紙本着色　額装　縦43.7×横57.8cm



のぞき見する蔵人少将

小学生にとっての歴史資料館

研修教諭　阿部和広

● はじめに

歴史資料館を利用する小学生は、歴史学習が主となる6年生と、くらしのうつりかわりを学習する3年生が中心である。また、指導要領に示された内容の取り扱いについても、両学年では地域の博物館や資料館の活用が明記されている。

では、資料館を活用する意義はどこにあるのだろうか。

3年生では、「過去の生活における人々の生活の知恵や苦労の様子を具体的にとらえさせ、人々の生き方に触れさせたり、自分自身と社会とのかかわりに気付かせたりすることに有効である。」と説明されている。

6年生では、「遠い祖先の生活が自分たちの今の生活とかかわりがあることに目を向けさせることができ、歴史的内容の学習への興味や関心を喚起させることもできる」と説明されている。

子どもの立場に立つと、身近な素材で、具体的な学習ができるということである。

● 資料館の2つの機能

歴史資料館を利用する目的として2つの側面がある。1つは知るという側面であり、2つは学ぶという側面である。この両側面は見学の位置付けが学習計画の中で、導入の段階か、追求の段階か、まとめの段階かによって決まってくる。知る側面であれば、導入段階か、まとめの段階であり、学ぶ側面であれば追求段階か、まとめ(発展的な取り組み)の段階である。

見学の実態からすると、3年生は学ぶ側面が、6年生は知る側面が主体である。なぜなら、3年生の場合は、見学対象そのものが学習内容であり、6年生の場合は、主たる学習内容ではないと考えられているからである。

このことは上記の資料館活用の意義が如実に示している。

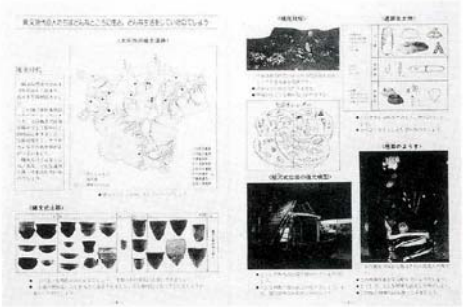
しかし、6年生の資料館活用の意義が、単なる興味・関心の喚起や歴史学習の意義付けだけでいいのだろうか。

もう少し積極的な意義持たせるために、学ぶ側面を重視した学習ノートを作成した。

● 知ることから学ぶために

見学には目当てが必要である。目当ての立て方によって、子ども達の対応が随分違ってくる。生きた見学、効果的な見学にするためには、しっかりとした見学の立場を持つことは大切である。

そこで、学習ノートを下記の意図のもとに作成した。



▲大分市歴史資料館「学習ノート」

(1) 時代の特色をつかむ。

コーナーごとに時代区分されて展示されているため、大まかな時代相を示した。

(2) その時代全体にかかわる課題を持つ。

その時代の特色をつかんだ上で、ここで何を学ぶのかという立場を持たせる。

(3) 課題を解決するための視点を持つ。

課題を解決するということは、展示された遺物。文献資料をどう見るかということである。その見方・考え方を示した。

この3つの立場を持って見学できたら、自分たちの祖先が、郷土でどう生きてきたか、どういう変遷を経てきたかを学べると考えたからである。

● 残された問題

学習ノートが利用されたとしても学ぶ側面は十分とは言えない。なぜなら、小学生の発達段階に合った学び方ができるようになっているかという問題がある。つまり、具体的であるか、体験を通せるかということである。

例えば、石器を例に上げてみよう。

- 手に持ったり、触ったりできるのか
- どうやって作るのか

何を使って、どのくらいの時間で

- どうやって使ったのだろう
- 本当に役に立ったのだろうか

切れるか、刺さるか、飛ぶか等生の資料に接するということは限りなく多くの、魅力ある問いを生む。このような願いや疑問が解決される対応がとられているかということである。「公民としての資質の基礎を養う」という社会科の究極目標に迫るためには、身近な素材で、具体的に人間の生きる姿を学ぶことが大切である。そのために、資料館として、より一層の対応が要求されている。

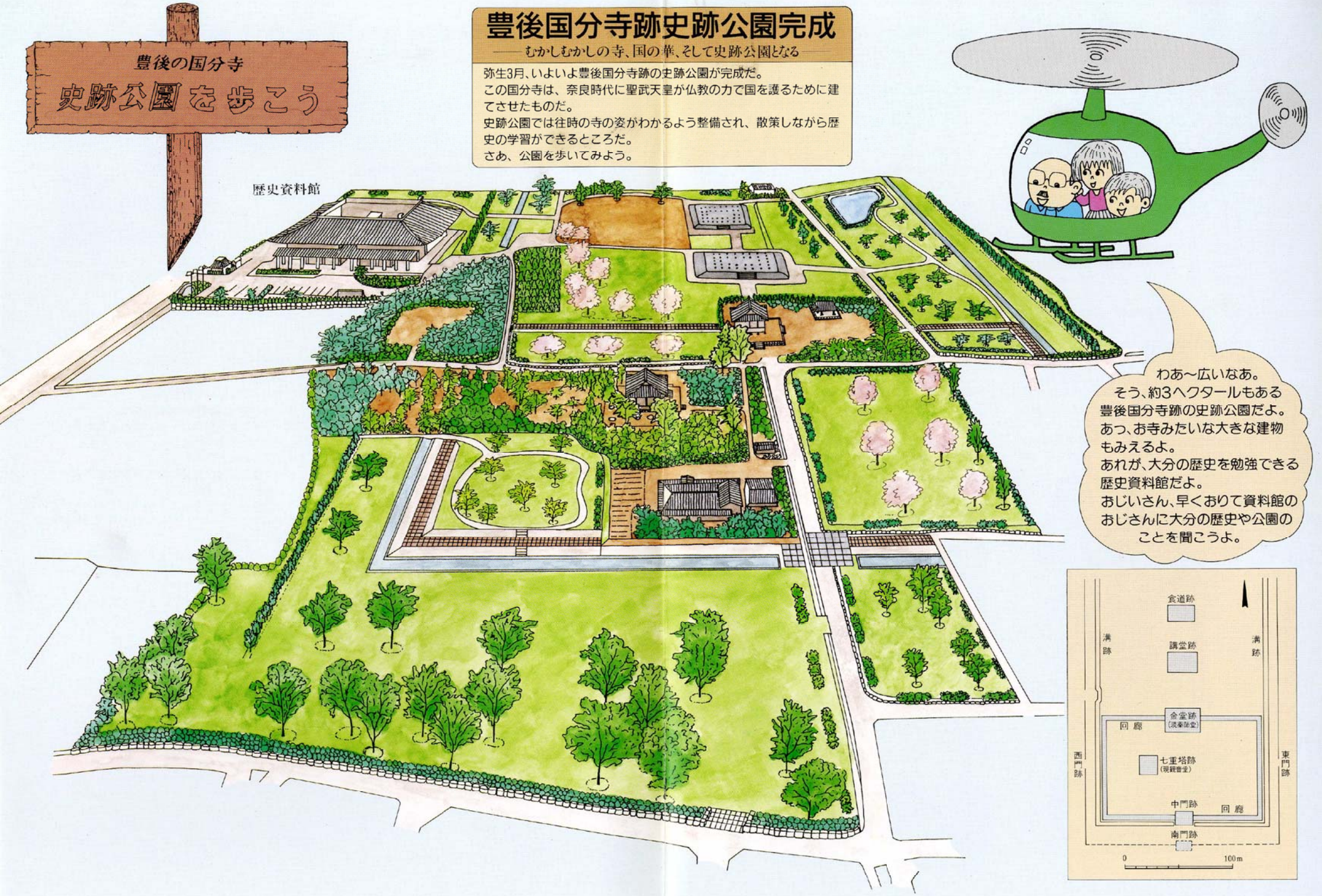
豊後の国分寺

史跡公園を歩こう

豊後国分寺跡史跡公園完成

―むかしむかしの寺、国の華、そして史跡公園となる―

弥生3月、いよいよ豊後国分寺跡の史跡公園が完成だ。
この国分寺は、奈良時代に聖武天皇が仏教の力で国を護るために建てさせたものだ。
史跡公園では往時の寺の姿がわかるよう整備され、散策しながら歴史の学習ができるところだ。
さあ、公園を歩いてみよう。



購　入　資　料　紹　介

府内藩関係資料

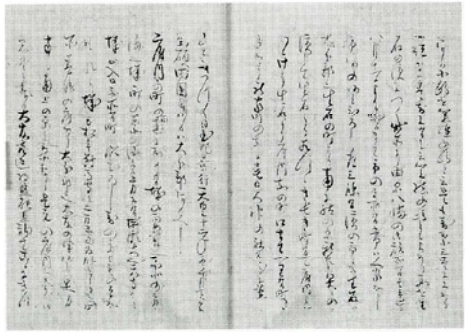
今回は今年度購入した府内藩・府内城下町関係資料から３点を紹介しましょう。

１．豊国紀行　福岡藩の儒学者貝原益軒（1630～1714）が元禄７年（1694）４月１日から20日まで豊前・豊後を旅行し、見聞した事をまとめた紀行文です。１日の朝福岡を出発した益軒は直方から田川を経由して、８日には中津城下を見学、翌日宇佐八幡宮を見物し、豊後高田・杵築を通り、11・12日両日は別府の温泉でくつろぎ、13日の朝海路府内に到着しています。本文では府内城下町について「町も頗るひろし、万の売物備はれり、（中略）此所は豊後の府なり。」とあり、城下町がいかに繁栄していたか知ることができます。また、百合若大臣と三弥長者伝説、杵原八幡宮や浜の市についての記述などもあり、江戸時代前半の府内近辺について詳しく教えてくれる貴重な文献です。現在益軒の自筆原本は所在不明で、写本しか残っていません。本資料と他本と比較すると、最後の１枚が欠けるだけで、大きな脱落はなく、江戸時代中頃までに書き写されたものと考えられます。

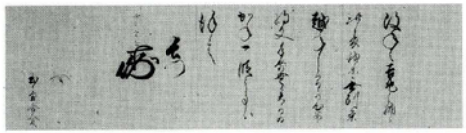
２．府内藩家老家伝来具足　府内藩家老を代々勤めた家に伝来した甲冑です。戦国時代に登場した当世具足をさらに簡略化し、蝶番により胴が５枚に分れる五枚胴型式で作られています。また、胴自体は鉄板を横に接ぎ、びょう止めし、さらに変化を持たせるため腰の部分を青糸で威すなど江戸時代の甲冑製作技術の特徴をよく表しています。兜の前方部の吹返には家紋が入っており、家の鎧として代々伝えられてきたことがわかります。府内藩についての文献史料は数多く残されていますが、大名や藩士の生活を物語る資料はほとんどありません。本資料は歴史的にも美術的にも価値の高い優品といえます。

３．歴代府内藩主書状14通　５代大給近形から10代近説まで６代にわたる府内藩主が江戸から国元の家老達に出した手紙です。内訳は５代近形１通、６代近儔２通、７代近義１通、８代近訓６通、９代近信３通、10代近説１通。そのほとんどが新春に無事年を越したことを報告し国元の様子を聞いている言うなれば年賀状ですが、中には参勤交替で無事江戸に到着した事や初めて将軍に面会が許された事を伝えた手紙もあります。１年間は国元を離れなければならなかった藩主の留守を守る人々に対する細やかな心遣いが伝わる資料です。

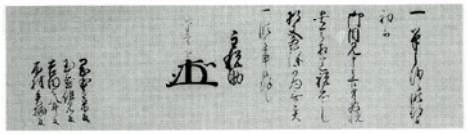
２．府内藩家老家伝来具足



１．豊国紀行



３．第６代大給近儔書状



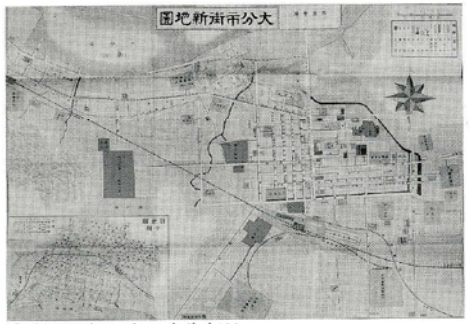
３．第９代大給近信書状

戦前の地図にみる大分市

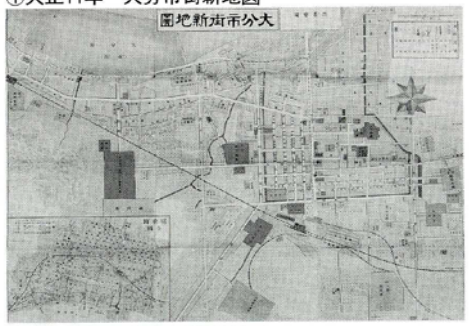
今年度の春の特別展では「古絵図にみる江戸時代の大分」と題して、江戸時代の古絵図をとおして大分の姿を再現してみました。今回は新しく購入した大正末から昭和始めにかけて作られた地図から大分市街地の変貌する様子を見てみましょう。

購入した地図は①大正11年刊大分市街新地図、②昭和４年刊大分市街新地図、③昭和９年大分新地図、④昭和12年刊大分市街地図の４点です。①と②は中心部のみで、③と④は市域地全体となっています。と言っても、当時の市域には東大分・鶴崎・稙田・八幡・大在・坂ノ市・大南地区は含まれていません。

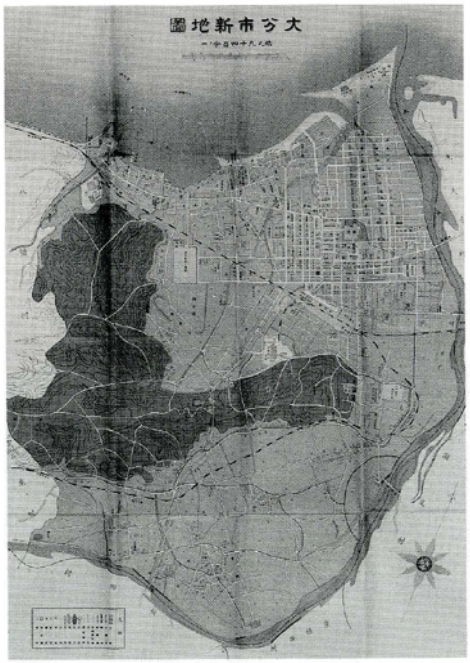
この４点を並べてみるとわずか16年の間でもいかに大分が変化していたかを知ることができます。まず①を見ると、中心部の区画は江戸時代の旧城下町のそれをほぼ踏襲しています。中堀・外堀は埋め立てられましたが、外堀はわずかながら残った水路から場所を知ることができます。また、堀川町にあった京泊港（現千代町付近）がまだその機能果たしており、塩九升町の船入りも痕跡を留めているなど旧城下町の面影を見ることができます。①と②を比べてみると、同じように見えますが、大きく違っているのが府内城跡の北側、現在の中島付近です。江戸時代はここは葦原と潮が引くと干潟になるような場所でしたが明治以降埋め立てられました。それでも、①では畑地ですが、②ではきれいに区画整理され、住宅地となっています。さらに、明治33年に開通した大分駅－別府間の電車が①では中央通りを北上し堀川町から西大分－別府と続く線と新川を経由して大分港までの２つありますが、②では堀川経由がなくなり、新川から別府へと続くようになっています。また、②と③を比較すると、４年まではあった京泊港と塩九升の船入りが９年では埋め立てられています。さらに、③では松栄神社の西側の掘も埋め立てられています。また、いまの金池町・顕徳町一帯と大分駅裏は②では田畑ですが、５年後の③では人家が密集し、市街地の一部となっています。このように大分の町は大正末ころまでは江戸時代の面影を残していましたが、昭和に入ると次第に周辺に拡大していき、現在の発展の基礎を築いたと言えるでしょう。なお、①②④の裏面には「大分市遊覧案内」があり、主要な建物と名勝旧跡の説明がされています。



①大正11年　大分市街新地図



②昭和４年　大分市街新地図



③昭和９年　大分市新地図